

論 説

ロシア連邦の人口「危機」と出生率

保 坂 哲 郎

はじめに

90年代初頭のロシア連邦は人口の減少という「平和時」には歴史上例を見ないといえる程の特異な状況が生まれ、ロシア連邦外からの流入数が増加しているにもかかわらず、自然減少を補填できない国になっている。非常に複合的要因から形成される人口の長期変動の中でなぜこのような状況が生まれてきたのか、その性格を考えて見たい。その中では旧ソ連邦・ロシア連邦の経験した歴史的な悲劇性と、現在の人口「危機」的要素とが複合している、と考える。

1. ロシア人口構成の歴史性

まず60年から90年代までの期間のロシア連邦人口変動の推移を見よう（表1参照）。

総人口を見てみると、この間に約2800万人増加し1億5千万人弱となる。毎年の総人口増加数は、60年代前半の150万人以上の水準から60年代後半には80万から60万人台に低下し、70年代は70万から90万人台に増加するが、70年代末から80年代初頭にかけて70万人台に低下、80年代は100万人前後の水準に上昇するが、89年以降90年代にかけて人口増は急減し、92年以降は減少となっている。

その内訳を見よう。自然増減数については、60年から66年にかけては100万人台の増加が見られるが、60年の193万人から66年の100万人に急落している。それ以降、80年代初頭までは70-80万人台の増加で推移している。82、83年、8

表1 ロシア人口

	総人口					都市人口		
	人口(年初)	増加	自然増加	純移動	増加率		総増加	自然増加
1960年	119045.8	1719.8	1927.8	-208.0	1.4	63739.8	2358.2	896.1
1961年	120765.6	1641.2	1789.5	-148.3	1.4	66098.0	1879.4	872.0
1962年	122406.8	1441.6	1559.3	-117.7	1.2	67977.4	1764.8	788.7
1963年	123848.4	1330.8	1424.1	-93.3	1.1	69742.2	1914.5	711.8
1964年	125179.2	1129.9	1241.9	-112.0	0.9	71656.7	1538.6	647.6
1965年	126309.1	880.0	1051.7	-171.7	0.7	73195.3	1502.8	563.8
1966年	127189.1	837.1	1002.3	-165.2	0.7	74698.1	1701.2	557.5
1967年	128026.2	669.8	851.1	-181.3	0.5	76399.3	1351.3	507.4
1968年	128696.0	682.8	792.3	-109.5	0.5	77750.6	1591.2	489.5
1969年	129378.8	674.8	755.9	-81.1	0.5	79341.8	1547.1	511.5
1970年	130079.2	650.8	778.4	-127.6	0.5	80981.1	1524.5	559.1
1971年	130704.4	741.1	854.7	-113.6	0.6	82413.4	1650.7	610.5
1972年	131445.5	764.5	849.6	-85.1	0.6	84064.1	1718.0	648.4
1973年	132210.0	730.4	791.7	-61.3	0.6	85782.1	1759.8	613.7
1974年	132940.4	834.5	875.4	-40.9	0.6	87541.9	1768.4	665.0
1975年	133774.9	915.2	809.0	106.2	0.7	89310.3	1756.9	644.8
1976年	134690.1	954.7	814.5	140.2	0.7	91067.2	1450.1	645.5
1977年	135644.8	951.3	783.1	168.2	0.7	92517.3	1399.5	622.8
1978年	136596.1	934.1	773.6	160.5	0.7	93916.8	1354.8	613.2
1979年	137551.0	761.2	686.2	75.0	0.6	95373.9	1318.3	564.4
1980年	138291.4	736.4	673.0	63.4	0.5	96589.9	1157.6	565.5
1981年	139027.8	788.4	708.4	80.0	0.6	97747.5	1221.8	577.6
1982年	139816.2	949.7	820.2	129.5	0.7	98969.3	1428.8	647.8
1983年	140765.9	1076.5	910.4	166.1	0.8	100398.1	1220.3	717.6
1984年	141842.4	980.2	754.2	226.0	0.7	101618.4	1203.6	610.2
1985年	142822.6	1012.6	745.4	267.2	0.7	102822.0	1323.8	597.5
1986年	143835.2	1279.7	983.7	296.0	0.9	104145.8	1552.3	744.8
1987年	145114.9	1228.4	964.4	264.0	0.8	105698.1	1427.5	735.2
1988年	146343.3	1034.5	783.0	251.5	0.7	107125.6	1242.5	603.8
1989年	147400.5	662.9	580.0	82.9	0.4	108425.6	870.3	436.3
1990年	148040.7	502.0	338.0	164.0	0.3	109238.4	560.0	250.0
1991年	148542.7	161.6	110.0	51.6	0.1	109798.4	-126.0	65.7
1992年	148704.3	-30.9	-207.0	176.1	-0.02	109672.4	-752.1	-176.8
1993年	148673.4	-307.6	-737.7	430.1	-0.2	108920.3	-458.5	-553.6
1994年	148365.8	-59.7	-869.7	810.0	-0.04	108461.8	-124.6	-642.4
1995年	148306.1	-329.7	-831.9	502.2	-0.2	108337.2	-216.0	-620.2
1996年	147976.4	-474.0	-817.6	343.6	-0.3	108121.2	-327.5	-578.1
1997年	147502.4	-397.8	-750.4	352.6	-0.3	107793.7	-265.4	-517.4

出典 ①-1998,cc.19-21.

の変動(千人)

			農村人口					
純移動	居住地分類変更	増加率		総増加	自然増加	純移動	居住地分類変更	増加率
1065.1	397.0	3.7	55306.0	-638.4	1031.7	-1273.1	-397.0	-1.2
558.8	448.6	2.8	54667.6	-238.2	917.5	-707.1	-448.6	-0.4
698.2	277.9	2.6	54429.4	-323.2	770.6	-815.9	-277.9	-0.6
993.2	209.5	2.7	54106.2	-583.7	712.3	-1086.5	-209.5	-1.1
673.1	217.9	2.1	53522.5	-408.7	594.3	-785.1	-217.9	-0.8
635.5	303.5	2.1	53113.8	-622.8	487.9	-807.2	-303.5	-1.2
831.6	312.1	2.3	52491.0	-864.1	444.8	-996.8	-312.1	-1.6
794.8	49.1	1.8	51626.9	-681.5	343.7	-976.1	-49.1	-1.3
1012.1	89.6	2.0	50945.4	-908.4	302.8	-1121.6	-89.6	-1.8
1013.9	21.7	1.9	50037.0	-872.3	244.4	-1095.0	-21.7	-1.7
853.5	111.9	1.9	49098.1	-873.7	219.3	-981.1	-111.9	-1.8
944.6	95.6	2.0	48291.0	-909.6	244.2	-1058.2	-95.6	-1.9
973.5	96.1	2.0	47381.4	-953.5	201.2	-1058.6	-96.1	-2.0
982.9	163.2	2.1	46427.9	-1029.4	178.0	-1044.2	-163.2	-2.2
1002.5	100.9	2.0	45398.5	-933.9	210.4	-1043.4	-100.9	-2.1
974.3	137.8	2.0	44464.6	-841.7	164.2	-868.1	-137.8	-1.9
701.8	102.8	1.6	43622.9	-494.5	169.0	-561.6	-102.8	-1.1
693.9	82.8	1.5	43127.5	-448.2	160.3	-525.7	-82.8	-1.0
652.8	88.8	1.4	42679.3	-420.7	160.4	-492.3	-88.8	-1.0
600.6	153.3	1.4	42177.1	-557.1	121.8	-525.6	-153.3	-1.3
548.7	43.4	1.2	41701.5	-421.2	107.5	-485.3	-43.4	-1.0
561.3	82.9	1.2	41280.3	-433.4	130.8	-481.3	-82.9	-1.0
522.6	258.4	1.4	40846.9	-479.1	172.4	-393.1	-258.4	-1.2
479.0	23.7	1.2	40367.8	-143.8	192.8	-312.9	-23.7	-0.4
503.6	89.8	1.2	40224.0	-223.4	144.0	-277.6	-89.8	-0.6
638.7	87.6	1.3	40000.6	-311.2	147.9	-371.5	-87.6	-0.8
684.1	123.4	1.5	39689.4	-272.6	238.9	-388.1	-123.4	-0.7
651.5	40.8	1.4	39416.8	-199.1	229.2	-387.5	-40.8	-0.5
582.0	56.7	1.2	39217.7	-208.0	179.2	-330.5	-56.7	-0.5
355.8	78.2	0.8	38974.9	-207.4	143.7	-272.9	-78.2	-0.5
236.6	73.4	0.5	38802.3	-58.0	88.0	-72.6	-73.4	-0.1
-5.8	-185.9	-0.1	38744.3	287.6	44.3	57.4	185.9	0.7
-113.4	-461.9	-0.7	39031.9	721.2	-30.2	289.5	461.9	1.8
166.1	-71.0	-0.4	39753.1	150.9	-184.1	264.0	71.0	0.4
537.6	-19.8	-0.1	39904.0	64.9	-227.3	272.4	19.8	0.2
406.0	-1.8	-0.2	39968.9	-113.7	-211.7	96.2	1.8	-0.3
309.4	-58.8	-0.3	39855.2	-146.5	-239.5	34.2	58.8	-0.4
296.2	-44.2	-0.2	39708.7	-132.4	-233.0	56.4	44.2	-0.3

6、87年と若干増加数が上昇するが、80年代末から急減し、92年以降減少となり、特に93年以降は70-80万人台の減少を続けている。

社会的移動数は対照的傾向を見せている。70年代中頃までは流出入口が10万人台規模で流入を超過しているが、それ以降は流入人口が流出を超過し、80年代後半や、特に94、95年には多くの流入人口の超過を見せている。

自然増の減少傾向、特に最近の減少数を社会的移動による増加数が補填できない状況が90年代には続いている。

都市と農村に区分して人口変動を見てみる。都市人口は、この37年間で、91年までは増加を続け約172%の増加率となっている。しかし、92年以降は減少傾向を見せ、97年までに約200万人の減少となっている。内訳的には、自然増減に関しては60年以降、90万人台から50-60万人台の増加に移行し、その水準は88年まで続くが、89年以降急減傾向を見せ、92年以降はマイナス、93年以降は50万人を越える水準でマイナスが続いている。

他方、社会的移動数は、91、92年のマイナスを除くと一貫してプラスであるがその水準は80年代以降50万人以下の水準に止まっている。92年以降、自然増を社会移動増が補填できない状況になっている。また、91年以降、居住地分類で都市分類からはずれぬ地域が継続して生まれている。

農村人口は91-94年にかけて増加している（居住地区分変更と社会的移動によるプラスが大きい）が、この時期を除くと一貫してマイナスである。自然増加数の低下傾向を示しており、92年以降はマイナスである。社会的移動は、91年までは一貫してマイナスが続いてきたがそれ以降、低水準ではあるがプラスが続いている。

いずれにしても、90年代に入ってから急激な人口自然減は特異な変動に見える。

表2はこの期間の出生・死亡数・率の変動をみた表である。

絶対数で見ると、出生数は減少傾向を示し、死亡数は1994年まで増加傾向を示している。また都市、農村双方とも基本的に同じ傾向を示している、といえる。

出生率（パ・ミール）は低下傾向を示している。都市に比べ農村の出生率はまだ幾分高いが低下率は農村のほうが若干高い。また、両者間で隔絶された出生率格差を見せてはいない。

死亡率は94年まで上昇傾向を見せている。1年未満乳児死亡率は、傾向的には低下傾向にあるといえるが、90年代は横這いであり、また農村で若干高くなっている。死亡率が先導的に低下する動きに伴って出生率が低下するのではなく、死亡率の上昇、乳幼児死亡率の横這いの中で、一方的に低下する出生率にロシアの特殊性、「人口危機」の側面がある。

90年代の急激な人口変動を理解する視点として二つ考えて見たい。第一はコホート規模の変動による出生数、死亡数の変動を理解する視点、第二は傾向的な出生率低下傾向の問題である。

まず第一の問題を見ていく。ロシアは20世紀に

経験した歴史的「悲劇」を人口構成にくっきりと刻印している国である（図1ロシアの人口年齢構成を参照）。

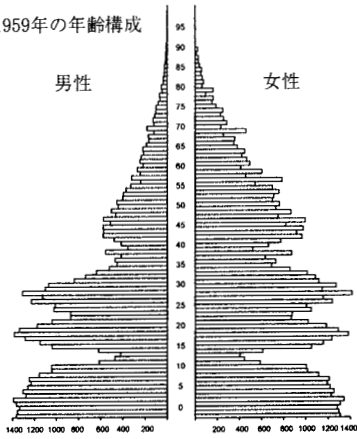
まず、59年人口調査に基づく人口ピラミッドを見ると、35-45才層が大きくくぼんでいる。15-29年にできた大きなくぼみは第一次大戦・内戦、20年代飢

表2 出生・死亡率

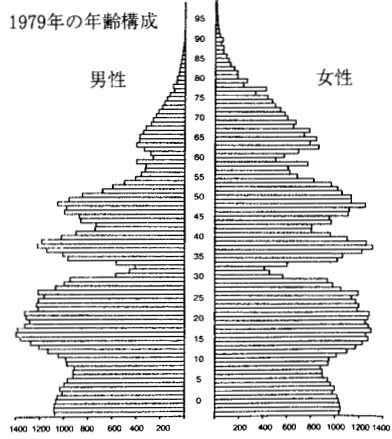
年	総数(千人)			千人当たり人数			
	出生	死亡	1年未満乳幼児死亡	出生	死亡	自然増減	1年未満乳幼児死亡
総人口							
1960年	2782	886	102	23.2	7.4	15.8	36.6
1970年	1904	1131	44	14.6	8.7	5.9	23.0
1980年	2203	1526	49	15.9	11.0	4.9	22.1
1990年	1989	1656	35	13.4	11.2	2.2	17.4
1991年	1795	1691	32	12.1	11.4	0.7	17.8
1992年	1588	1807	29	10.7	12.2	-1.5	18.0
1993年	1379	2129	28	9.4	14.5	-5.1	19.9
1994年	1408	2301	26	9.6	15.7	-6.1	18.6
1995年	1364	2204	25	9.3	15.0	-5.7	18.1
1996年	1305	2082	23	8.9	14.2	-5.3	17.4
1997年	1260	2016	22	8.6	13.8	-5.2	17.2
都市人口							
1960年	1333	437	46	20.4	6.7	13.7	34.9
1970年	1205	646	26	14.8	7.9	6.9	22.1
1980年	1536	970	32	15.8	10.0	5.8	21.2
1990年	1386	1141	24	12.7	10.4	2.3	17.0
1991年	1231	1169	22	11.2	10.6	0.6	17.2
1992年	1068	1255	19	9.8	11.5	-1.7	17.6
1993年	931	1488	18	8.6	13.8	-5.2	19.2
1994年	960	1615	17	8.9	15.0	-6.1	17.9
1995年	933	1554	16	8.6	14.4	-5.8	17.4
1996年	898	1446	15	8.3	13.4	-5.1	16.4
1997年	870	1388	14	8.1	12.9	-4.8	16.1
農村人口							
1960年	1450	449	56	26.5	8.2	18.3	38.1
1970年	699	485	17	14.3	10.0	4.3	24.5
1980年	667	555	16	16.1	13.4	2.7	24.0
1990年	603	515	11	15.5	13.3	2.2	18.3
1991年	564	522	11	14.5	13.4	1.1	19.1
1992年	519	553	10	13.2	14.1	-0.9	19.1
1993年	448	641	10	11.5	16.4	-4.9	21.4
1994年	448	686	9	11.4	17.5	-6.1	20.1
1995年	430	650	9	10.9	16.5	-5.6	19.8
1996年	407	636	8	10.4	16.2	-5.8	19.4
1997年	390	628	8	10.0	16.1	-6.1	19.6

出典①-1998,cc.50-52.

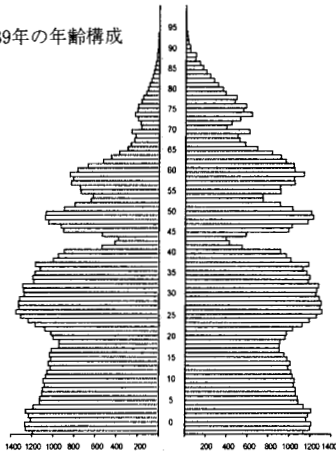
1959年の年齢構成



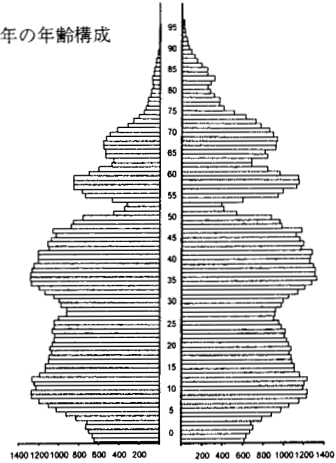
1979年の年齢構成



1989年の年齢構成



1998年の年齢構成



出典 ①-1998,cc.39-42.

図1 ロシアの人口年齢構成

餓と、30年代の飢餓、スターリン粛正の影響と、第二次大戦の影響とが重複している、といわれる。第一次大戦、内戦の結果できた平均より小さい出生コホートは第二次大戦による影響にも巻き込まれた。特に成人男性の多くの死亡が生まれている。

次に、この期間の出生率急落の結果、10-15才層に大きなコホート縮小が見られ、そのエコー効果が79年人口調査に基づく人口ピラミッドの5-10才層コホートの縮小に見られる(② -pp.12-13.)89年人口調査に基づく人口ピラミッドでは、40-45才層のくぼみ、15-20才層のくぼみとなって現れ、98年人口調査に基づく人口ピラミッドでは、24-29才層のくぼみが目立ち、それは現在の出生数減少をもたらしている一要因である。

「ロシア史の悲劇的諸事件のため、人口の年齢構造に大きな変異がもたらされ、相対的に小さい、あるいは豊かなコホートが年齢・性ピラミッドで交互になっている。これは現在の人口危機の文脈の中で非常に重要である、なぜなら最近の低出生率の多くの程度は出産年齢ピークの親の縮小にあるからである」と、ペレベジエンチェフは述べている(③ -p.18)。

90年代の出産年齢女性コホート数を見ても(表3参照)1990-93年にかけてその規模は縮小し、94年以降回復しており、90年代前半の出生数減少の一因であることは確認できる。

表3 出産年齢(15-49才)女性コホート(千人)

年 齢	89年	90年	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	98年
15-19才	4849	4968	5043	5125	5160	5237	5305	5366	5403	5513
20-24才	4799	4671	4619	4607	4689	4778	4932	4969	5145	5192
25-29才	6184	5939	5601	5292	5002	4777	4659	4632	4646	4749
小 計	15832	15578	15263	15024	14851	14792	14896	14944	15194	15454
増 減		-254	-315	-239	-173	-59	104	48	250	260
30-34才	6390	6405	6452	6458	6370	6200	5963	5642	5339	5059
35-39才	5863	5963	6096	6179	6257	6392	6421	6478	6488	6408
40-44才	3887	4607	5192	5455	5674	5853	5946	6082	6167	6253
45-49才	4188	3456	2961	2865	3218	3800	4558	5134	5339	5623
計	36160	36009	35964	35981	36370	37037	37784	38303	38527	38797
増 減		-151	-45	17	389	667	747	519	224	270

出典 ①-1998,cc.32-33, ①-1997,cc.36-37, ④-1998,cc.105-107.

2, 出生率低下傾向

この期間の純再生産率（与えられた年齢別死亡率のもとで一女性が産んだ女子の中で出産適期まで生き残る数）を見ると（表4参照），総体的には60年代中頃から1を割っており，80年代後半に一時的に1を越えるが，それ以降急落しており，人口縮小再生産の性格をもっている。

都市人口は早くから1を割っているが，農村人口も93年以降は1を割っているのである。長期にわたる出生率低下傾向が見られ，特に90年代の急落は特徴的といえる。いわゆる「人口転換」の進展過程が見られるといえる（社会の都市化，「近代化」，また所得向上に伴う少産・少子型人口構成への移行が，現在のロシアに見られる意味とは違った意味で「危機」的内容を持っていると筆者は考えるが，その点は別稿で展開してみたい）。

この傾向を促進した要因としては，社会の都市生活化，工業化が主要な要因であると考えられる。先ほど引用したペレベジェンチェフも，都市化は人口変動に影響する最も重要な要因であり，ロシアでは20年代後半から都市居住者数，その比率は急増し，古典的農村国としてロシアは50年代中に圧倒的に都市的となった。90年代までに都市居住者はロシア人の3/4を占めた。農村からの青年移住が都市人口増加の主因（もっとも彼らは典型的な農村人口行動を都市に

表4 純再生産率
(net reproduction rate)

年	総計	都市人口	農村人口
1961-62年	1.095	0.882	1.425
1962-63年	1.061	0.848	1.420
1963-64年	1.018	0.814	1.407
1964-65年	0.971	0.790	1.351
1965-66年	0.989	0.803	1.390
1966-67年	0.971	0.795	1.373
1967-68年	0.937	0.781	1.320
1968-69年	0.961	0.807	1.319
1969-70年	0.934	0.816	1.218
1970-71年	0.947	0.833	1.242
1971-72年	0.951	0.839	1.258
1972-73年	0.936	0.826	1.259
1973-74年	0.932	0.820	1.271
1974-75年	0.932	0.818	1.307
1975-76年	0.921	0.807	1.310
1976-77年	0.907	0.797	1.290
1977-78年	0.893	0.787	1.267
1978-79年	0.882	0.792	1.177
1979-80年	0.874	0.783	1.192
1980-81年	0.878	0.783	1.223
1981-82年	0.901	0.799	1.285
1982-83年	0.953	0.844	1.375
1983-84年	0.974	0.863	1.404
1984-85年	0.964	0.855	1.387
1985-86年	0.995	0.883	1.429
1986-87年	1.038	0.923	1.483
1988年	1.005	0.896	1.432
1989年	0.953	0.866	1.267
1990年	0.895	0.804	1.226
1991年	0.821	0.726	1.160
1992年	0.735	0.641	1.049
1993年	0.651	0.570	0.921
1994年	0.659	0.587	0.900
1995年	0.633	0.569	0.846
1996年	0.603	0.544	0.797
1997年	0.579	0.525	0.756

出典 ①-1998,c.112.

持ち込んだが)であり、都市人口中で農村生まれの移住者比率が徐々に低下し小家族への都市的傾向が現れた。農村人口もさらに都市的価値をもち都市者の人口選好を受容し、農村出生率低下へ導いた、と述べている(③-pp.18-19.)。

現在のロシアは大都市・都市集塊の国であり、また農村も通常多くの国で見られるような散居式農村でなく、「集団化された」農村であり、さらに都市への人口流出で苦悩してきた地域であるという特徴をもっている。農村でも集団農場で労働し都市的居住様式が一定の要素を作り、一般的な農村での家族形態は都市的家族・生活様式と共通したのもをもってきている、といえる。農村特有の大家族的特徴はロシアでは見ることはできないと考える。さらにその農村は高齢化・核家族化の浸透が見られるのである(表5参照)。

表5 家族構成員比率(同居)

家族数	2人	3人	4人	5人	6人	平均家族員数
1959年全家族	26.7	26.6	21.8	13.2	6.8	3.6
都市人口家族	27.2	29.3	23.1	12.1	5.2	3.5
農村人口家族	26.1	23.6	20.3	14.3	8.6	3.8
1970年全家族	26.5	27.9	24.9	12.1	5.0	3.5
都市人口家族	26.1	31.5	26.8	10.7	3.4	3.4
農村人口家族	27.4	21.8	21.6	14.6	7.9	3.8
1979年全家族	31.6	31.6	23.4	8.6	3.0	3.3
都市人口家族	30.5	33.9	24.5	7.8	2.2	3.2
農村人口家族	34.2	26.3	20.7	10.3	4.6	3.4
1989年全家族	34.2	28.0	25.2	8.3	2.7	3.2
都市人口家族	33.1	29.6	26.1	7.8	2.4	3.2
農村人口家族	37.2	23.6	22.9	10.0	3.9	3.3

出典⑤-1959,T1-cc.452-453,1970,T7-cc.252-255,1979,T6-cc.54-55,1989,T3-cc.8-9.

ここでは、2人家族の比率は農村で上昇し35%以上に達し、3人・4人家族の比率は都市のほうが大きくなるがそれ以上の規模は農村のほうが大いという差が見られる。しかしその差は大きなものとはいえない。平均家族員数でみるとほとんど都市家族数に収斂してきているといえるのである。

さらに、ロシアでは90年代前半をピークとする、低年齢出産比率の上昇傾向が見られる(表6参照)。

90年代に入り全体的に出生率は大きく低下するのであるが、年齢別に見ると15-19才層のみが90年まで上昇を続け、94年くらいまで高い水準を維持してい

るのである。この動向と違って20-30才層は87年以降低下を続けていく。この2つの動向は都市でも農村でも同様である。ロシアでは圧倒的に10台後半から20才台の母親の出産で終わるが90年代前半は若干その点は加速された（対照的に、例えば日本では出産の高齢化が進み25-39才層が圧倒的比率をしめる）。ロシアは、特に90年代前半には、一人っ子を比較的低年齢で出産して終わる、という特徴を持つ。この点は「人口転換」の意味と異なった人口「危機」の現れである、と考える。

表6 年齢別出生率（女性千人当たり出生数）

	15-19才	20-24才	25-29才	30-34才	35-39才
1961-62年	27.2	156.7	142.8	191.8	47.3
1962-63年	21.3	156.3	137.3	86.0	44.5
1963-64年	21.0	156.2	130.3	80.5	41.4
1964-65年	22.7	150.8	122.8	77.3	39.2
1965-66年	24.7	150.3	120.1	77.7	38.1
1966-67年	25.6	147.8	114.9	77.0	36.1
1967-68年	26.0	143.1	110.9	74.0	33.5
1968-69年	27.3	142.9	109.0	72.4	32.0
1969-70年	28.3	146.9	107.4	69.3	32.2
1970-71年	29.7	152.6	109.5	68.0	32.5
1971-72年	30.9	156.1	116.3	65.6	33.0
1972-73年	31.5	154.7	114.4	63.3	32.5
1973-74年	32.8	155.5	112.8	60.0	30.9
1974-75年	33.9	158.8	110.5	58.6	28.9
1975-76年	34.5	158.8	108.0	58.2	26.5
1976-77年	35.6	158.6	107.8	60.0	23.7
1977-78年	37.0	156.2	106.5	59.2	21.6
1978-79年	40.8	155.0	103.1	55.6	19.6
1979-80年	42.7	157.1	101.2	52.6	18.4
1980-81年	43.6	157.6	102.0	52.0	18.8
1981-82年	43.6	159.1	105.9	54.9	21.9
1982-83年	44.7	163.8	113.1	59.8	23.9
1983-84年	46.1	166.3	114.9	61.2	24.0
1984-85年	46.9	164.2	113.3	60.0	23.2
1985-86年	46.9	165.7	117.5	63.0	24.5
1987年	48.5	170.6	122.6	67.8	27.8
1988年	49.6	167.9	114.1	61.8	25.6
1989年	52.5	163.9	103.1	54.6	22.0
1990年	55.6	156.8	193.2	48.2	19.4
1991年	54.9	146.6	83.0	41.6	16.5
1992年	51.4	134.0	72.7	35.0	13.9
1993年	47.9	120.4	65.0	29.6	11.4
1994年	49.9	120.3	67.2	29.6	10.6
1995年	45.6	113.5	67.2	29.7	10.7
1996年	39.7	106.4	66.5	30.3	10.8
1997年	36.2	99.0	66.2	31.5	10.8

出典①-1998,c.152.

3、人口変動の地域的格差

この10年間の変動に焦点をあわせ、地域別に89-98年間の人口変動を見たのが表7である。

この10年間に、都市、農村人口が双方とも減少した地域が北・北西・中央・極東地区であり、双方とも増加した地区が沿ボルガ・北カフカース・ウラル地区である。都市人口が増加し農村人口が減少した地区がボルガ・ビャツク、中央

表7 地域別人口変動（1989年-98年、千人）

地 域	総人口	都市人口	農村人口
ロシア連邦	-295	-896	601
北部地区	-339	-300	-39
北西地区	-295	-253	-42
中央地区	-714	-448	-266
ボルガ・ビャツク地区	-101	57	-158
中央黒土地区	106	215	-109
沿ボルガ地区	476	319	157
北カフカス地区	956	180	776
ウラル地区	127	36	91
西シベリア地区	106	-184	290
東シベリア地区	-84	-101	17
極東地区	-605	-461	-144

出典①-1998,cc.23-31.

黒土地区であり、反対に都市人口が減少し農村人口が増加した地区が東西シベリア地区である。90年代にはこれまでと逆の人口増減が生じている。これまで人口増加・集中地区であった北西・中央地区の都市・農村で人口減少が著しい。

出生率、死亡率とも地区間の格差はかなり大きなもの（40%、27%）があるし、またより小さい単位で見ると、例えば中央地区ツーラ州と北カフカス地区ダゲスタン共和国を見られるように、出生率、死亡率とも15パーミール前後の大きい格差が見られるのである（農村における高齢化の進展による死亡率の上昇に加えて、ロシア連邦内部でも人口自然増はスラブ系民族以外の民族居住地で維持されており、スラブ系ロシア人を取り出すとずっと人口減少は激しいのではないのかという仮説が考えられるが、この点は次の人口調査結果を見て考えてみたい）。

表8は地域別に、出生率、死亡率、自然増減率（いずれもパーミール）を見た表である。

出生率で全国平均より大きく低下している地域が北西、中央地区であり、都市部、農村部双方でそのような位置にある。他方、死亡率で全国平均より大きく高い地域が北西・中央・中央黒土地区である。

都市部を見ると、出生率が大きく全国平均より低く死亡率では高い地区は北西・中央地区であり、農村部を見ると、そのような地区は北西・中央・中央黒土地区である。90年代前半の人口減少をもたらした地域は、主要には、北西・中央・中央黒土地区であると、見ることができる。

都市、農村別に北西地区、中央地区の出生・死亡・自然増減率をしてみる（表9参照）。

表8 ロシア連邦地域別出生

総人口	〔出生〕						〔死亡〕	
	90年	93年	94年	95年	96年	97年	90年	93年
ロシア連邦	13.4	9.4	9.6	9.3	8.9	8.6	11.2	14.5
北	13.0	8.8	9.0	8.7	8.6	8.3	9.1	13.3
北西	11.1	7.0	7.3	7.2	6.8	6.8	12.7	17.9
中央	11.0	7.6	7.8	7.7	7.5	7.3	13.0	16.6
ボルガ・ビャツク	13.0	8.9	9.0	8.6	8.3	8.0	11.9	14.6
中央黒土	11.9	8.9	9.0	8.5	8.2	7.7	13.7	16.3
沿ボルガ	13.7	9.8	9.9	9.3	8.8	8.5	11.0	13.4
北カフカス	16.1	11.9	12.2	12.0	11.2	10.8	11.1	13.6
ウラル	14.0	9.8	10.1	9.5	9.3	9.1	10.4	13.8
西シベリア	13.9	9.6	9.7	9.4	9.2	9.0	9.6	13.0
東シベリア	16.1	11.0	11.4	11.0	10.6	10.1	9.5	13.0
極東	15.5	10.5	10.7	10.2	9.7	9.3	8.2	11.8
都市人口								
ロシア連邦	12.7	8.6	8.9	8.6	8.3	8.1	10.4	13.8
北	12.7	8.4	8.8	8.6	8.5	8.3	8.2	12.3
北西	11.1	6.9	7.3	7.2	6.8	6.8	12.1	17.2
中央	10.9	7.4	7.7	7.7	7.5	7.3	12.0	15.6
ボルガ・ビャツク	12.6	8.4	8.6	8.3	7.9	7.8	10.3	13.0
中央黒土	12.5	8.7	8.8	8.5	8.1	7.7	10.6	13.0
沿ボルガ	13.2	9.1	9.2	8.7	8.3	8.0	10.2	12.5
北カフカス	14.1	10.2	10.5	10.3	9.7	9.3	10.9	13.4
ウラル	13.1	9	9.3	8.8	8.6	8.4	10.0	13.4
西シベリア	13.2	8.9	9.1	9	8.8	8.6	9.1	12.5
東シベリア	14.7	10	10.6	10.3	10.0	9.5	9.0	12.8
極東	14.4	9.5	9.8	9.4	8.9	8.6	8.1	11.8
農村人口								
ロシア連邦	15.5	11.5	11.4	10.9	10.4	10.0	13.3	16.4
北	14.3	10.1	9.7	9	8.7	8.4	12.1	16.5
北西	11.1	7.3	7.5	7.2	6.9	6.9	16.7	22.9
中央	11.6	8.4	8.3	8	7.6	7.2	17.5	21.6
ボルガ・ビャツク	13.8	10.2	9.9	9.4	9.0	8.6	15.4	18.3
中央黒土	11.2	9.1	9.3	8.7	8.3	7.6	18.6	21.7
沿ボルガ	15.2	11.7	11.6	10.9	10.1	9.7	13.4	15.8
北カフカス	18.6	14.3	14.4	14.3	13.2	12.7	11.4	13.7
ウラル	16.9	12.4	12.2	11.5	11.2	10.9	11.7	15.1
西シベリア	15.6	11.3	11	10.5	10.2	9.9	11.1	14.1
東シベリア	19.5	13.5	13.3	12.6	12.2	11.5	10.7	13.6
極東	18.8	13.4	13.6	12.8	12.1	11.4	8.5	11.6

出典①-1995,cc.45-77,-1998,cc.56-88.

・ 死亡・自然増減 (千人当たり数)

				〔自然増減〕					
94年	95年	96年	97年	90年	93年	94年	95年	96年	97年
15.7	15.0	14.2	13.8	2.2	-5.1	-6.1	-5.7	-5.3	-5.2
14.8	14.2	13.2	12.2	3.9	-4.5	-5.8	-5.5	-4.6	-3.9
18.5	17.3	15.5	14.7	-1.6	-10.9	-11.2	-10.1	-8.7	-7.9
18.2	17.3	16.2	15.8	-2.0	-9.0	-10.4	-9.6	-8.7	-8.5
16.2	15.8	14.7	14.6	1.1	-5.7	-7.2	-7.2	-6.4	-6.6
17.1	16.3	16.0	15.9	-1.8	-7.4	-8.1	-7.8	-7.8	-8.2
14.6	14.1	13.6	13.4	2.7	-3.6	-4.7	-4.8	-4.8	-4.9
13.9	13.6	13.1	12.9	5.0	-1.7	-1.7	-1.6	-1.9	-2.1
15.3	14.5	13.6	13.1	3.6	-4.0	-5.2	-5.0	-4.3	-4.0
14.1	13.5	13.1	12.5	4.3	-3.4	-4.4	-4.1	-3.9	-3.5
14.6	13.7	13.0	12.5	6.6	-2.0	-3.2	-2.7	-2.4	-2.4
12.7	12.6	12.1	11.4	7.3	-1.3	-2.0	-2.4	-2.4	-2.1
15.0	14.4	13.4	12.9	2.3	-5.2	-6.1	-5.8	-5.1	-4.8
13.7	13.3	12.0	11.0	4.5	-3.9	-4.9	-4.7	-3.5	-2.7
17.6	16.4	14.6	13.8	-1.0	-10.3	-10.3	-9.2	-7.8	-7.0
17.0	16.4	15.1	14.6	-1.1	-8.2	-9.3	-8.7	-7.6	-7.3
14.5	14.4	13.0	12.9	2.3	-4.6	-5.9	-6.1	-5.1	-5.1
13.7	13.3	12.7	12.7	1.9	-4.3	-4.9	-4.8	-4.6	-5.0
13.8	13.3	12.8	12.5	3.0	-3.4	-4.6	-4.6	-4.5	-4.5
13.9	13.5	12.9	12.6	3.2	-3.2	-3.4	-3.2	-3.2	-3.3
15.0	14.2	13.2	12.6	3.1	-4.4	-5.7	-5.4	-4.6	-4.2
13.7	13.1	12.7	11.9	4.1	-3.6	-4.6	-4.1	-3.9	-3.3
14.4	13.7	12.8	12.1	5.7	-2.8	-3.8	-3.4	-2.8	-2.6
12.8	12.8	12.1	11.3	6.3	-2.3	-3.0	-3.4	-3.2	-2.7
17.5	16.5	16.2	16.1	2.2	-4.9	-6.1	-5.6	-5.8	-6.1
18.2	17.1	16.7	16.1	2.2	-6.4	-8.5	-8.1	-8.0	-7.7
24.7	23.0	21.5	21.0	-5.6	-15.6	-17.2	-15.8	-14.6	-14.1
23.7	22.0	21.5	21.3	-5.9	-13.2	-15.4	-14.0	-13.9	-14.1
20.0	18.9	18.7	18.6	-1.6	-8.1	-10.1	-9.5	-9.7	-10.0
22.5	21.1	21.2	21.1	-7.4	-12.6	-13.2	-12.4	-12.9	-13.5
17.0	16.0	15.8	15.7	1.8	-4.1	-5.4	-5.1	-5.7	-6.0
13.9	13.6	13.4	13.3	7.2	0.6	0.5	0.7	-0.2	-0.6
16.3	15.2	14.6	14.5	5.2	-2.7	-4.1	-3.7	-3.4	-3.6
15.0	14.3	14.3	14.0	4.5	-2.8	-4.0	-3.8	-4.1	-4.1
15.0	13.9	13.6	13.6	8.8	-0.1	-1.7	-1.3	-1.4	-2.1
12.2	11.9	12.0	11.8	10.3	1.8	1.4	0.9	0.1	-0.4

表9 北西、中央地区の出生

総人口	〔出生〕						〔死亡〕	
	90年	93年	94年	95年	96年	97年	90年	93年
〔北西地区〕								
サンクト・パテルブルグ	10.8	6.6	7.1	7.0	6.6	6.6	12.2	17.4
レニングラド	11.0	7.1	7.4	7.2	6.9	6.9	12.5	17.9
ノブフォロド	12.2	7.9	8.0	7.9	7.5	7.4	14.1	18.8
プスコフ	11.9	8.0	8.0	7.7	7.6	7.5	15.1	20.4
都市人口								
サンクト・パテルブルグ	10.8	6.6	7.1	7.0	6.6	6.6	12.2	17.4
レニングラド	11.2	7.4	7.5	7.5	7.0	7.0	12.4	17.4
ノブフォロド	12.0	7.7	7.9	7.7	7.7	7.4	11.6	15.8
プスコフ	12.4	8.2	8.2	7.8	7.9	7.8	11.3	15.9
農村人口								
レニングラド	10.7	6.5	7.1	6.7	6.7	6.8	12.8	18.8
ノブフォロド	12.7	8.4	8.4	8.3	7.1	7.3	20.0	25.9
プスコフ	10.9	7.8	7.6	7.5	7.0	6.8	21.6	28.6
〔中央地区〕								
ブリヤン	13.0	10.2	9.8	9.2	8.7	8.0	12.8	15.9
ウラジミール	12.1	7.9	8.1	7.6	7.5	7.2	12.5	15.7
イワノボ	11.6	8.1	7.6	7.3	7.0	6.7	14.0	17.0
カルノーガム	11.9	8.0	8.2	7.9	7.3	7.2	12.4	15.8
コストロム	12.6	8.2	8.7	7.9	7.9	7.7	13.4	16.0
モスクワ市	10.5	7.1	7.6	8.0	7.9	7.8	12.8	16.5
モスクワ	10.2	6.9	7.2	7.2	7.0	6.7	12.2	16.0
オリョール	12.2	9.2	9.5	8.7	8.3	7.6	13.0	16.0
リヤザン	11.6	8.1	8.1	7.8	7.5	7.1	14.0	17.1
スモレンスク	11.8	8.2	8.5	8.0	7.6	7.0	13.2	16.5
ツベリ	11.5	7.7	7.7	7.5	7.2	7.1	14.8	19.4
ツベラ	10.2	7.7	7.6	7.3	6.9	6.7	14.4	18.4
ヤロスラフ	11.3	7.2	7.8	7.6	7.3	7.1	13.2	17.1
都市人口								
ブリヤン	13.2	9.8	9.5	9.0	8.5	7.8	10.4	13.2
ウラジミール	12.1	7.8	7.9	7.5	7.3	7.1	11.3	14.2
イワノボ	11.3	7.9	7.5	7.2	7.0	6.7	13.5	16.5
カルノーガム	11.9	7.7	8.1	7.7	7.2	7.1	10.4	13.2
コストロム	11.9	7.8	8.5	7.9	7.9	7.8	12.0	14.8
モスクワ市	10.5	7.1	7.6	8.0	7.9	7.8	12.8	16.5
モスクワ	10.1	6.9	7.2	7.1	7.0	6.8	11.5	15.3
オリョール	11.8	8.6	9.1	8.5	8.1	7.4	10.0	12.8
リヤザン	12.2	8.0	8.2	7.9	7.7	7.3	10.5	13.1
スモレンスク	11.9	8.2	8.5	8.0	7.6	7.1	10.4	13.8
ツベリ	11.2	7.5	7.6	7.4	7.2	7.0	12.4	16.9
ツベラ	10.1	7.5	7.4	7.1	6.8	6.5	13.2	17.1
ヤロスラフ	11.1	7.1	7.6	7.5	7.2	7.1	12.2	16.1
農村人口								
ブリヤン	12.5	11.0	10.3	9.7	9.1	8.4	18.0	21.6
ウラジミール	12.1	8.4	8.5	8.0	8.1	7.4	16.9	21.9
イワノボ	12.6	8.7	8.1	7.6	7.0	6.8	16.2	19.1
カルノーガム	12.0	8.6	8.3	8.3	7.6	7.6	17.2	22.9
コストロム	14.1	8.8	8.9	8.0	7.7	7.4	16.4	18.2
モスクワ	10.6	7.2	7.3	7.4	7.2	6.6	14.6	18.9
オリョール	13.0	10.0	10.1	9.1	8.5	7.8	18.1	21.3
リヤザン	10.4	8.2	7.8	7.6	7.2	6.5	20.8	26.3
スモレンスク	11.5	8.2	8.6	8.1	7.5	7.0	19.3	22.6
ツベリ	12.3	8.3	8.0	7.8	7.3	7.5	21.0	26.1
ツベラ	10.4	8.3	8.3	8.1	7.4	7.6	19.7	23.9
ヤロスラフ	11.9	7.7	8.6	8.0	7.6	7.0	17.7	21.4

・ 死亡・自然増減率 (パーミール)

				(自然増減)					
94年	95年	96年	97年	90年	93年	94年	95年	96年	97年
17.2	15.9	14.2	13.4	-1.4	-10.8	-10.1	-8.9	-7.6	-6.8
19.4	18.2	16.2	15.3	-1.5	-10.8	-12.0	-11.0	-9.3	-8.4
20.3	19.7	18.2	17.1	-1.9	-10.9	-12.3	-11.8	-10.7	-9.7
22.6	20.8	19.5	19.3	-3.2	-12.4	-14.6	-13.1	-11.9	-11.8
17.2	15.9	14.2	13.4	-1.4	-10.8	-10.1	-8.9	-7.6	-6.8
19.1	18.1	15.8	14.7	-1.2	-10.0	-11.6	-10.6	-8.8	-7.7
17.1	16.3	15.0	13.9	0.4	-8.1	-9.2	-8.6	-7.3	-6.5
17.9	16.8	15.4	15.1	1.1	-7.7	-9.7	-9.0	-7.5	-7.3
19.9	18.4	16.8	16.4	-2.1	-12.3	-12.8	-11.7	-10.1	-9.6
27.9	27.9	26.1	24.9	-7.3	-17.5	-19.5	-19.6	-19.0	-17.6
31.4	28.3	27.4	27.6	-10.7	-20.8	-23.8	-20.8	-20.4	-20.8
16.9	15.9	15.5	16.2	0.2	-5.7	-7.1	-6.7	-6.8	-8.2
17.3	16.4	15.9	15.7	-0.4	-7.8	-9.2	-8.8	-8.4	-8.5
18.9	18.3	17.8	17.7	-2.4	-8.9	-11.3	-11.0	-10.8	-11.0
17.4	16.4	15.4	15.4	-0.5	-7.8	-9.2	-8.5	-8.1	-8.2
18.2	17.0	16.8	16.3	-0.8	-7.8	-9.5	-9.1	-8.9	-8.6
17.6	16.9	15.0	14.4	-2.3	-9.4	-10.0	-8.9	-7.1	-6.6
18.1	17.6	16.0	15.1	-2.0	-9.1	-10.9	-10.4	-9.0	-8.4
16.8	16.0	15.7	15.4	-0.8	-6.8	-7.3	-7.3	-7.4	-7.8
19.1	17.9	17.4	17.4	-2.4	-9.0	-11.0	-10.1	-9.9	-10.3
18.0	16.9	16.7	17.2	-1.4	-8.3	-9.5	-8.9	-9.1	-10.2
21.0	19.4	18.6	18.2	-3.3	-11.7	-13.3	-11.9	-11.4	-11.1
20.5	19.4	18.4	18.2	-4.2	-10.7	-12.9	-12.1	-11.5	-11.5
18.9	17.3	17.0	16.4	-1.9	-9.9	-11.1	-9.7	-9.7	-9.3
14.1	13.5	12.9	13.7	2.8	-3.4	-4.6	-4.5	-4.4	-5.9
15.7	15.0	14.5	14.3	0.8	-6.4	-7.8	-7.5	-7.2	-7.2
18.5	18.0	17.4	17.2	-2.2	-8.6	-11.0	-10.8	-10.4	-10.5
14.7	14.4	13.2	13.1	1.5	-5.5	-6.6	-6.7	-6.0	-6.0
16.8	15.8	15.3	14.9	-0.1	-7.0	-8.3	-7.9	-7.4	-7.1
17.6	16.9	15.0	14.4	-2.3	-9.4	-10.0	-8.9	-7.1	-6.6
17.3	16.9	15.3	14.4	-1.4	-8.4	-10.1	-9.8	-8.3	-7.6
13.5	13.0	12.6	12.5	1.8	-4.2	-4.4	-4.5	-4.5	-5.1
14.9	14.3	13.6	13.7	1.7	-5.1	-6.7	-6.4	-5.9	-6.4
14.9	14.2	13.8	13.9	1.5	-5.6	-6.4	-6.2	-6.2	-6.8
18.3	17.2	16.0	15.5	-1.2	-9.4	-10.7	-9.8	-8.8	-8.5
19.1	18.1	17.2	16.9	-3.1	-9.6	-11.7	-11.0	-10.4	-10.4
17.7	16.3	15.9	15.1	-1.1	-9.0	-10.1	-8.8	-8.7	-8.0
22.8	21.1	21.1	21.9	-5.5	-10.6	-12.5	-11.4	-12.0	-13.5
23.6	22.1	21.6	21.6	-4.8	-13.5	-15.1	-14.1	-13.5	-14.2
20.7	19.8	19.4	20.2	-3.6	-10.4	-12.6	-12.2	-12.4	-13.4
24.8	22.2	21.5	22.0	-5.2	-14.3	-16.5	-13.9	-13.9	-14.4
20.7	19.3	19.7	19.2	-2.3	-9.4	-11.8	-11.3	-12.0	-11.8
21.3	20.1	18.7	17.6	-4.0	-11.7	-14.0	-12.7	-11.5	-11.0
22.4	21.1	21.0	20.3	-5.1	-11.3	-12.3	-12.0	-12.5	-12.5
27.7	25.6	25.6	25.5	-10.4	-17.1	-19.9	-18.0	-18.4	-19.0
24.9	23.2	23.4	24.9	-7.8	-14.4	-16.4	-15.1	-15.9	-17.9
28.3	25.4	25.5	25.4	-8.7	-17.8	-20.3	-17.6	-18.2	-17.9
26.7	25.0	23.7	23.8	-9.3	-15.6	-18.4	-16.9	-16.3	-16.2
23.7	22.0	21.7	21.4	-5.8	-13.7	-15.1	-14.0	-14.1	-14.4

北西地区を見ると、人口減少率が最高に高い州はプスコフで農村部の死亡率が飛び抜けて高い。またレニングラード州は出生率も低く死亡率も高く人口減少率が高い。サンクト・ペテルブルグは出生率が他より低い死亡率は他と同等に近く、減少率が特に高いという訳ではない。

中央地区を見ると、トウベリーやツーラの出生率の低さと死亡率の高さが目立ち人口減少率も高い。また農村部ではリヤザン、トウベリーで出生率が低く死亡率が高い。この2州を筆頭としてスモーレンスク、ツーラの農村部での死亡率も高い。

出生率の低さに大きく寄与している大都市部・大都市近郊部、死亡率の高さに大きく寄与しているモスクワ・サンクトペテルブルグ周辺地域の農村部という姿が浮かび上がる。

出生率の低さ、死亡率の高さは対照的である。全国的に見ても出生率は工業国最低水準のイタリアなみ、死亡率はインドの70年代に相当、という姿になる。この2つの動向を関連するものとして捉え、しかも死亡率の動向がが社会の変動をより敏感に反映する数字として捉える中で人口「危機」問題を考えることが必要である。

4、ロシア人口「危機」説について

以上の幾つかの特徴に見られたようなロシア人口の90年代の変動をどう評価するのか。人口「危機」と呼べるのか、「危機」は存在しないのか。人口「危機」であるなら、どの点をもって「危機」と見なすのか。

多くの論者は経済・社会的危機と人口減少とが関連を持っていることを認める。例えば、ヴェルコフは「厳しい経済状態」と「平均より小さいコホートが第一次出産年齢グループに入った（第二次大戦出生コホートの児童）」要因の結合が非常に低い出生率をもたらした、と述べる（②-p.6）。またカツリスキー等も「人口危機は経済、民族間関係、社会・政治制度、諸地域のエコロジー的破局の危機と密接に関連している」（⑥-c.37）、エリザーロフも「現代の厳しい不安定な社会政治的状況は人口状態に深刻な影響を与え、60-80年代に作ら

れた不適当な傾向を強めている」(⑦-c.55)と述べるが、その関連の仕方は考察せず曖昧な形になっている。

人口「危機」説を強く主張するのはペレベジエンチェフである(③)。彼はいう、これまでの外的要因による人口減少と異なり、今回の場合は「内因的で、多くの人の一人以上の子供をもつ親になる事への抵抗、出産自主規制を含んでいる」、 「ロシアは着実にまた急速に現在の人口危機に向かっており、その危機は90年代に根付いたものでなく60年代に根付いたものである。換言すれば現在の人口減は過去に、そして過去によって予定された」ものである、という。都市化に伴う再生産率の低下、ペレストロイカ期の出産促進現象をあげた上で、90年代前半の人口減少を「ソ連邦崩壊、新経済システムへの転換、一種の不確実性、生活の質の急落とともに人々が経験した心理的ショックと関連して」おり、「1993年には新しい急落が生じ、死亡率の急増で目立った。…それは疑いもなく健康ケア・システムの破壊的变化、中毒・精神的外傷・殺人・自殺による早期死亡数の急増と関連している」と述べる。

現在のロシアの人口危機の構成は多数からなり複雑であるとして次の5点を指摘する。

第一に、伝統的な人口再生産パターン（高い出生・死亡率）からの転換は、まだロシアで完了していないが、一般的プロセスである。様々な社会経済グループ間のなお大きな出生率格差が見られる。

第二に、最近の出産可能年齢女性コホートの縮小。

第三に、現在の社会経済的状况のもとで多くの可能性ある親はより良い時まで出産を延期している。

第四に、80年代後半の相対的に高い出生率。アルコール濫用反対、ペレストロイカ開始による期待膨張させた人口政策。人口波の上げ波は下降波出産の前倒しであり人口減少を促進した。

第五に、これまで粗死亡率を高めた原因は高齢化であったが、現在は急速な平均寿命低下が目立ち、特定年齢層の死亡率が増大している。理由は深い経済危機による生活諸条件の全般的悪化である。

ここでは、人口「危機」問題が、単なる出生率低下でなく、死亡率上昇も含

めた全体的な人口変動として把握され、その悪化現象が指摘されているが、その点は正しい視点と思う。しかし、人口「危機」の出生面に関しては、長期的な「人口転換」そのものが持つ「危機」と、ロシアの90年代に特有に見られた「危機」とが十分に区別され、分析されているとは思えない。

次に、今回のロシア人口減少、特に出生率低下に「危機」はなく、第一の「人口転換」と第二の「人口転換」の併合した現象である、という主張、ザハロフの主張を見ていきたい(⑧、⑨)。

ロシアにおける出生率は80年代初頭には経済発達諸国の平均レベルでありヨーロッパの多くの国々より高く、その時点までに2子家族モデルは確立された。

短期の出生率変動は女性の様々な年齢グループの出産タイミングの変化を反映している。この間の特徴を見ると、第1に、80年代後半の人口政策。より若い年齢での育児傾向が強化され出産タイミングが変化した。80年代後半から90年代央の出生率落ち込みは先行する世代の結婚、出産計画の変形の結果である。80年代の結婚、出産の「過剰」が90年代の「不足」を定めた。しかし、結婚年齢、望ましい子供数に関する人々の行動は急速には変わらず、数十年にわたり安定的である。

第2に、最初の結婚平均年齢は記録的に低い。この点でロシアは出産年齢高齢化を示す西側からはずれた。西側諸国標準では25才までに実際の結婚・再生産期が始まるが、ロシアの女性は既に子供関連計画の60%をなしとげ、既に少なくとも全女性の80%は公然の結婚に入っている。20才以下の全結婚の半分以上で花嫁は妊娠している。

以上の特徴にもかかわらず、特殊ロシア的現象とされた出生率危機は現実には存在しない。ロシアの社会経済危機から言及される「人口危機結果」ははなはなく誇張されている。経済危機の結果、出産延期があっても事態はそう深刻ではない。警告主義からの予測は根拠をもっていない。もし何らかの出生率危機があるなら、それは単に西側諸国でみられる再生産や結婚行動の危機にすぎない。

ロシアにおいて、重要な変化の先触れが見られるが、それは第二の人口転換過程の開始である、といえる。

第1に、第二の人口転換開始諸国では変化は15-19歳年齢グループの出生減少で始まったが、ロシアではこの減少は91年に始まった。第2に、80年代半に始まり、結婚を経ない出生数増加は伝統的結婚よりも共通なものになることを示している。第3に、70年代半から墮胎は一貫して減少し、88年以降のロシア出生率急落はもはや墮胎数増加を伴っていない。

ここでは、ペレベジェンチェフとは逆に、出生率低下は第一の人口転換進行のプロセスにすぎず、その中で見られるロシア的特異性も第二の人口転換開始の先触れとして把握されている。

ま と め

筆者の考えは繰り返し述べてきたように、少なくとも出生率と死亡率とを統一的に見る中で人口「危機」的問題を考えるべきである、というものである。本稿では触れていないが、死亡率の上昇、特に乳幼児死亡率の横這いは重要な人口「危機」の発現である。つまり、第一の人口転換もまず死亡率の変動で見ていくべきである。その点では、ペレベジェンチェフのいう「ロシアでの人口増加政策」も出生率向上を視野にいれているのであるが、筆者はまず、死亡率（特に乳幼児死亡率）の低下・平均寿命の延長の視点を持つべきであると考ええる。

90年代初頭に見られるロシア人口減少という現象は、80年代後半の出生の「前倒し」の要因、経済・社会的危機を反映した一時的低下の側面、出産可能年齢女性コホートの縮小等の複合と考える必要があると思われるが、その中で生まれている、出生率は西欧最低なみ、若年出産比率の高さはラテン・アメリカなみ、死亡率の高さはインドの70年代なみという不均衡さに「危機」が反映されていると考える。

ザハロフは、ロシアの全出生が若年層に集中し、その動向に左右される点を米国にも見られるユニークな点と見なし、91年以降、若年層の出生率が低下した点を指摘するのであるが、90年代には女性全年齢層の出生率が低下しており、その中で若年層比率は向上しているのであって、第一の人口転換とは逆な特徴

が見えるのである。

また、この時期に現れた「形式的に自由な」出産の若年化現象を単純に第二の人口転換の開始と見なすには根拠は薄弱であり、既に90年代後半にはこの現象は見えなくなっているのである。

* 本研究は平成11年度文部省科学研究費補助金、基礎研究（C）の補助を受けた。

引用文献

- ① Демографический Ежегодник России.
- ② Victoria A. Velkoff, Age Structures of the Former Soviet Republics, *Population Under Duress*, edited by George J. Demko, Grigory Ioffe, Zhanna Zayonchkovskaya, 1999.
- ③ Victor Perevedentsev, The Demographic Situation in Post-Soviet Russia, *Population Under Duress*, edited by George J. Demko, Grigory Ioffe, Zhanna Zayonchkovskaya, 1999.
- ④ Российский Статистический Ежегодник.
- ⑤ Итоги Всесоюзной Переписи Населения.
- ⑥ Е. Д. Катульский, Г. Г. Меликьян, И. А. Злоказов, Демографическая Ситуация в России накануне XXI века, Социологические Исследования, 1997-6.
- ⑦ В. В. Елизаров, Демографическая Ситуация и Проблемы Семейной Политики, Социологические Исследования, 1998-2.
- ⑧ С. В. Захаров, Е. И. Иванова, Рождаемость и Брачность в России, Социологические Исследования, 1997-7.
- ⑨ Sergei Zakharov Fertility, Nuptiality, and Family Planning in Russia: Problems and Prospects, *Population Under Duress*, edited by George J. Demko, Grigory Ioffe, Zhanna Zayonchkovskaya, 1999. なお, *Russia's Demographic "Crisis"*, edited by Julie DaVanzo, 1996, の第2章 Fertility Decline and Recent Changes in Russia: on the threshold of the second demographic transition も彼の同趣旨の論文である。